

産休・育休から復職前の小学校教員の態度構造について

真田 穰人*・栗原 慎二

(2024年12月9日受理)

Attitudes construct of elementary school teachers before returning to work
after maternity and childcare leave

Shigeto Sanada and Shinji Kurihara

Abstract: The purpose of this study is to analyze the attitude construct of elementary school teachers before returning to work after maternity leave and childcare leave, and to consider ways to support their return to work after maternity leave and childcare leave. PAC (personal attitude construct) Analysis was conducted on three female elementary school teachers. The results showed that teachers returning to work after maternity leave and childcare leave are anxious about balancing work and family life due to the sense of responsibility and rigor of the work as a teacher, and because they know how busy the school is, they hesitate even to contact them to get information about the work. However, it was suggested that by contacting colleagues and the principal and vice principal and sharing information, they may be able to return to work with peace of mind.

Key words : return to work, maternity leave, childcare leave,
elementary school teachers, PAC analysis

1. 問題と目的

学校教員の過重労働とそれに伴う教員不足が大きな問題となっている。教員志望者の減少や休業・求職者の増加とともに、教員不足の要因となっているのが、産休・育休取得者が見込みより増加していること（文部科学省，2022）である。文部科学省は、取組の一つとして、学校における働き方改革の推進など勤務環境の改善を含めた教職の魅力向上を挙げている。

学校では、女性教員が妊娠・出産後も働き続けるための制度が早い段階から整えられてきた。しかし、これまでは、家庭責任を負っていない教員と家庭責任を負っている教員とで職務を分離することで学校を運営することができていたが、現在は、教員の仕事の多忙化により、家庭責任を負っている教員に対する配慮が限界に近づいており、自助努力しか残されていないことを、高島（2014）は指摘している。その結果、教員が出産を望む場

合、制度面は以前よりも充実し、働き続ける環境は整えられているにもかかわらず、様々な調査において、女性教員の妊娠、出産、育児への不安が多く示されている（山本，2018）。また、育児休業を取得する際に、復職後の不安、特に復職後の職場や仕事の変化に対応できないことへの懸念が高い割合であることが報告されている（長崎県教育委員会，2015）。

このような産休・育休からの復職の困難さについては、看護師や作業療法士、医師等の医療従事者を対象とした研究はこれまで多くなされてきた（例えば、横山・北村・小林・臼田・河野・後藤，2013）。しかし、学校教員については、実態調査や報告に留まり、量的質的に検討した研究は希少である。医療従事者と職務が異なる小学校教員では、復職に対して異なる不安をもっていたり、異なる支援ニーズがあったりする可能性がある。

それらの支援ニーズを捉え、働き方改革の推進など勤務環境の改善を行うことは、新規採用者の

* 兵庫教育大学大学院

確保につながるだけでなく、産休・育休取得者にとって復職しやすい環境を整えることにもつながると考えられる。また、出産や子育ての経験をした産休・育休取得者の復職は、学校のみドルリーダールとなり得る教員の確保という観点からも、重要であると考えられる。

しかし、産休・育休取得者がそもそも復職に対してどのような意識や態度を抱えているかはあまり明らかにされていない。そこで、本研究では、産休・育休からの復職者を対象に復職前の小学校教員の態度構造の分析を試み、産休・育休からの復職支援への方策を探ることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査協力者 本研究では、X市において、出産を経て、産前産後休暇と育児休暇から復職した女性教員3名(A,B,C)から協力を得た。研究協力者は、研究実施者の知り合いを通じたスノーボールサンプリングを用いて募集を行った。

2.2. 研究の方法 本研究は、PAC分析(内藤, 2017)を用いた調査研究であった。連想刺激として、「あなたは、産休・育休からの復職前にどのようなことを感じていましたか。また、復職に際しどのような支援が必要と感じていましたか。頭に浮かんできたイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」という文章を呈示し、口頭教示も行った。刺激文の作成は内藤(2017)の刺激文やその作成手順、留意点を参考にした。教示後、頭に浮かばなくなるまで自由連想させ、各カードに記入させた。その後、対象者にとって重要と感じられる順位づけを実施し、連想反応項目間の類似度を評定させた。類似度評定の後で、クラスター分析(Ward法)を行い、その後に対象者に、再度面接調査を実施した。

2.3. 聴取時期 202X年8月にデンドログラム抽出までと、イメージ解釈を2日に分けて聴取した。

2.4. 倫理的配慮 調査の実施にあたり、書面及び口頭で調査内容について十分な説明を行った。また、研究への参加は自由意志であり、たとえ研究への参加を拒否したとしても、研究協力者に一切不利益は生じないこと、研究への参加を同意した場合であっても、いつでも参加への意思を撤回できるということ、研究で得られた個人情報などのデータは匿名化され、本研究では匿名化された情報を用いることなどを説明し、調査と研究結果の

公表の同意を得た。

3. 結果と考察

3.1. 調査協力者Aの結果と考察

3.1.1. 調査協力者Aによるクラスターの解釈(抜粋)

クラスター1は、「休んでいる間に仕事内容は変わっているのでやっていけるだろうか」¹から「平日の動き方を家族と話し合い。決めておかないといけない」までの7項目で構成される。以下に、調査協力者が述べたクラスターに対する解釈を抜粋して示す。

仕事に対する不安、自分だけじゃどうしようもできない内容。周りとの連携、協力とか調整をする部分。自分だけの問題じゃないなあという部分が多い。子どものことを考えた内容、子どもがいるからこそ気になっている部分。自分だけでは何ともできないことだから、友達や先輩、周りに聞いて、情報を得ておきたい。自分が気になっている心配事がみんな気になっていたやろうから、どんな風に乗り越えたのか、教職の友だちとか経験ある人を中心に聞いていたい。そうやってやっていったらいいんだとか。

また、家族の時間が減るから、家族と関わる時間あるのかなあという心配。今まで通り余裕をもって接してあげたいという気持ち。余裕がなくて、うまく関わってあげられないのはいやだなあという気持ち。家にいる時間は減るので、夫の負担は大きくなるだろうなあ。時間が減るので。仕事の方にも迷惑をかけそうという気持ちもあるし、家の方にも今までよりもプラスにならない気持ち。

クラスター2は、「同僚の様子や学年配置」と「学校児童の様子、状態」の2項目で構成される。

今までは学校とは全く別世界で、育休中は学校のことを考えていなかった。でも、情報も得とかなないという思い。自分が仕事を進めるために。学校児童が落ち着いていないと心配、知っておいたら安心材料になるから知っておきたい。

クラスター3は、「我が子と接する時間が減る」から「復帰したら大変で買い物ができないから、ストックを買っておこう」の5項目で構成される。

プライベート、自分と自分の家族のことを考えている。復帰するから仕事のことも考えたいけど、仕事のことだけ考えるとしんどくなりそう。プライベートを充実させるための内容。復帰した後の

¹ 「」内の語句は、連想語を示している。

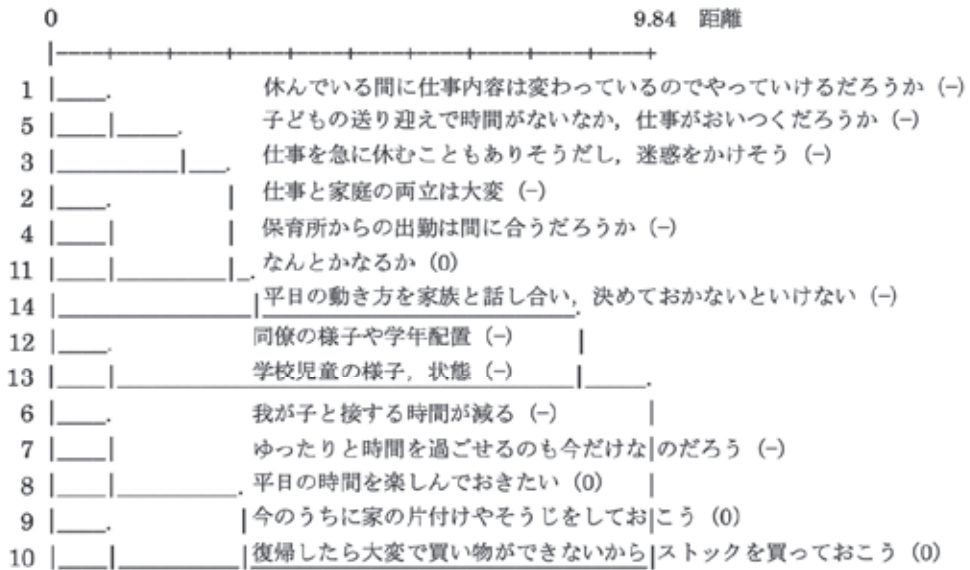


Figure 1 調査対象者 A のデンドログラム

1) 左の数値は重要順位 2) 各項目の後ろの () 内の符号は単独でのイメージ

14 項目のうち、+は 0 項目、-は 10 項目、0 は 4 項目

ことも考えて今のうちにできることは何かな。仕事に復帰したらしにくい、するのが難しい内容。

3.1.2. クラスター間の比較

クラスター1 と 2 の比較：クラスター1 は、仕事に復帰したらどうなるかわからないからあくまでイメージというか想像。クラスター2 も、わからないこと。仕事に復帰してからのイメージや今の同僚、わからないことへの心配感。クラスター1 は仕事も家庭も考えている。クラスター2 は仕事のことだけ。

クラスター1 と 3 の比較：2 つとも家庭のことを考えている。1 のまともりは不安な要素が大きい、3 はこうしておいたほうが良いというプラスの考え。クラスター1 は、仕事復帰してからのこと、想定、わからないこと、始まってからのことを考えている。クラスター3 は仕事を復帰する前のこと、今やっておけること。時間のまともりが違う。クラスター3 は自分だけで勝手にできそう、クラスター1 は自分だけではどうしてもできないこと。自分だけでは好きに調整できないから。

クラスター2 と 3 の比較：充実させるところは似ている。クラスター2 は、仕事場の状況、仕事のことを考えている。仕事をするうえで知っていたら仕事はかどる、やりやすい、安心すること。

クラスター3 は、家庭のこと、自分のこと、家庭を充実させるために考えていること。

3.1.3. 全体のイメージ

仕事ってするのは大変。仕事も家庭も大事にしたいからこそ、思っていること。どっちのことも考えている。どっちもうまくいくように。どっちもうまくしたい。

仕事復帰してからのことをいろいろ考えるけど、実際どんな生活になるかわからないから、考えてもきりないから、やってみながら、うまく変えていって生活リズムを整えていったらいいという感じ、とりあえず復帰してやってみよう、考えてもどうしようもない、とりあえずがんばってみようというプラスのイメージ。どんな生活になるかわかってから、その生活がうまく進めるように変えていく。もともとプラスに考えるタイプ、同じ話を聞いてもそれをプラスに考える。そう考えたらいいなあ、ポジティブに捉えられるように。今から考えると、二人目の出産後のほうが両立が大変であった。

3.1.4. 調査協力者 A についての考察

はじめに、それぞれのクラスターの内容について記述した後で、全体的特徴について考察する。

クラスター1 は、「休んでいる間に仕事内容は変

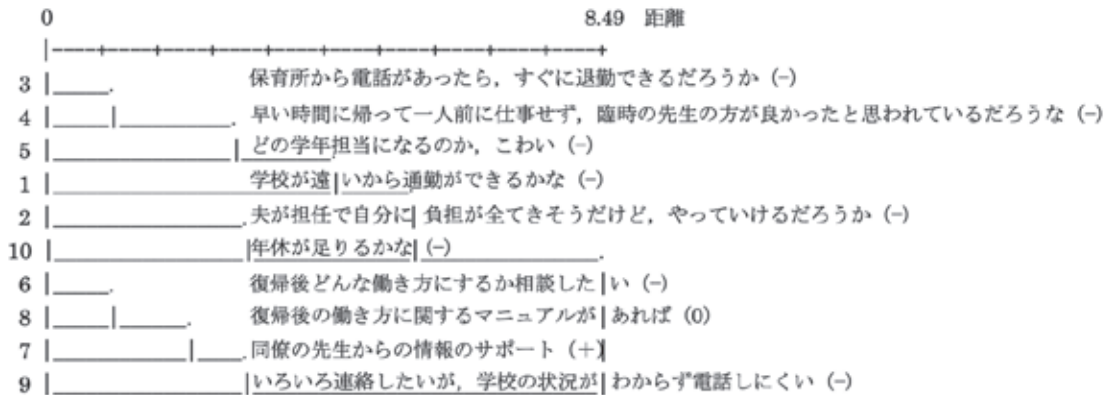


Figure 2 調査対象者 B のデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位 2) 各項目の後ろの () 内の符号は単独でのイメージ
10 項目のうち、+は 1 項目、-は 8 項目、0 は 1 項目

わっているのでやっていけるだろうか」という思いとともに子どもの送り迎えや保育所からの出勤、仕事を急に休む可能性を心配するなど、仕事と子育ての両立を心配していることから、＜仕事と家庭の両立への不安＞²と命名できよう。

クラスター2は、「同僚の様子や学年配置」とともに、「学校児童の様子、状態」が気になり、それらを知ることで安心すると語っていたことから、＜学校の現状把握欲求＞のクラスターと言えよう。

クラスター3は、「今のうちに家の片付けやそうじをしておこう」、「復帰したら大変で買い物ができないからストックを買っておこう」というように、復職時の忙しさに備えてできることをしておこうと感じていたことから、＜家庭に関する復職の準備＞と解釈できよう。

全体としては、この調査協力者のクラスター構成は、＜仕事と家庭の両立への不安（クラスター1）＞が＜学校の現状把握欲求（クラスター2）＞に結節し、最後にそれらと＜家庭に関する復職の準備（クラスター3）＞が結節していた。久しぶりに学校現場に復職するため、仕事内容そのものの変化にも不安があるし、初めて子育てと並行して仕事を行う不安や、急な予定変更が余儀なくされる子育てのために同僚に迷惑をかけてしまうことにも不安を感じるなど、様々な不安に苛まれている。しかし、危惧していることは全てが初体験であると同時に自分一人で解決できることではなく、復職するまでは想像しかできないため、安心することはできない。それらについて、学校の現

状を把握し見通しをもち、家庭に関する復職の準備をする等、未経験である子育てをしながらの教職にできる限り備えることで復職後の生活に適応しようとする態度が示された。産休・育休からの復職経験をもつ先輩教員からの情報サポートや同僚からの情報サポートが、復職を予定している教員の不安を軽減する可能性が示されたと言えよう。

3.2. 調査協力者 B の結果と考察

3.2.1. 調査協力者 B によるクラスターの解釈(抜粋)

クラスター1は、「保育所から電話があったら、すぐに退勤できるだろうか」から「年休が足りるかな」までの6項目で構成される。

家と学校の両立がちゃんとできるのかな、家庭は自分のことだけど、仕事に迷惑かけるのがこわいなあというのが一番。子どもに何かあったときに優先して退勤したい気持ちはあるけど、それはそれで行きにくいという思い。いろいろ考えてくれている学校なので安心な部分はあるけど、それでも担当はどこになるのかこわい。両立が一番なのかな。仕事も一人前にしたいという気持ちもある。夫は担任なので途中で退勤しにくい。夫婦で仕事のバランスとる分、結局、子育ての負担は私にくるのかなという思い。同じ復職直後の同僚がいるから安心なところがある。先に先輩がいろいろ経験をして教えてくれるので。そういう人がいないともっと不安だったと思う。その意味ではましだった。

² ＜＞内の語句は、クラスター名を示している。

クラスター2は、「復帰後どんな働き方にするか相談したい」から「いろいろ連絡したいが、学校の状況がわからず電話しにくい」までの4項目で構成される。

復帰後にどのように働くのか、学校が遠いし、子どももいるので相談もしに行きにくかった。だからといって電話をしたくても、学校が忙しいのに自分の話をするのが申し訳なくて、しにくかった。管理職からも、復職後の働き方をどうするか聞かれなかったのも、出産前と同じ働き方をしなくてはいけないのかと想像してドキドキしていた。教頭先生も制度をあまり知らなかったみたいで。復職された先輩の先生に少しラインしたら、復職後の短時間勤務等の制度についてすごい返信して教えてくれた。管理職には訊かれなかったことが不安だった。じゃー復帰の日にねと言われて、挨拶しなくてもいいのか、復帰前にドキドキした。学校の状況もわからないし、働き方もわからないし。先輩がいなかったら、制度を知らないまま働いていたかもしれない。産休・育休に入る前に、復職後はこういう働き方があるよという告知があれば、気持ちも楽になって、出産前から考えることができたのかもしれない。復帰したらどうするか考えるのは産後は忙しいし余裕がないので、早めにそういうサポートがあれば。でも、先に復職して色々教えてくれた先輩の先生にとっても感謝している。

3.2.2. クラスター間の比較

2つのクラスターで共通しているのは、働き方をどうするか。クラスター1は、家と学校のこと。クラスター2は、学校の働き方のこと。

3.2.3. 全体のイメージ

やはり会って相談したかった。でも学校現場は忙しいので、そんな時間はないだろうという思いもある。実は産休・育休前から電車に乗車するのがこわかった。産休前、出勤時に満員電車でホームに出るのが難しいときがあって。そんな相談もしたかった。しかし、学校の状況がわからず電話で相談もしにくかった。マニュアルがあったり、ちょっと後押しの言葉があれば、電話もできたかもしれない。やっぱり、一回相談に行った方がよかった。学校の状況が見えるし、家にいるとわからないから。

3.2.4. 調査協力者Bについての考察

クラスター1は、「夫が担任で自分に負担が全てきそうだけど、やっていけるだろうか」という思いとともに、保育所からお迎えの要請があった場

合の早退や校務分掌の不安、同僚からの視線を心配するなど、仕事と子育ての両立を心配していることから、＜仕事と家庭の両立への不安＞と解釈できるだろう。

クラスター2は、「復帰後どんな働き方にするか相談したい」という思いがあるものの、「いろいろ連絡したいが、学校の状況がわからず電話しにくい」ため、「復帰後の働き方に関するマニュアルがあれば」と考えていたこと、その一方で、「同僚の先生からの情報のサポート」を得ることができて助かり、感謝していたことから、＜働き方に関する情報や相談の希求＞のクラスターと言えよう。

全体としては、この調査協力者のクラスター構造は、＜仕事と家庭の両立への不安（クラスター1）＞と＜働き方に関する情報や相談の希求（クラスター2）＞が対になり結節していた。調査協力者Aと同様に、初めて子育てと並行して仕事を行う不安や子の体調不良で早退等することで同僚に迷惑をかけてしまうことに不安を感じるなど、仕事と家庭の両立について様々な不安を感じていた。それらに対応するため、復職後の働き方について相談したり、情報を得ることで見通しを得たいと感じていたものの、学校現場の忙しさを知っているため、相談や連絡をすることが憚られて、なかなかできずにいた。一方、そのような状況において、調査協力者Bの大きな助けになったのが、Bと同様に産休・育休からの復職を経験していた先輩教員からのサポートであった。特に情理的サポートをBは感じていたが、Bと同じ苦労や心配を経験をしていた先輩教員から、情理的サポートと同時に情緒的サポートが行われていたことは、想像に難くない。同僚からのソーシャルサポートが、復職前の小学校教員の不安を軽減する可能性が改めて示されたと言えよう。

3.3. 調査協力者Cの結果と考察

3.3.1. 調査協力者Cによるクラスターの解釈(抜粋)

クラスター1は、「学校現場を離れている間にいろいろなことが進んでいるのがこわい」から「同期や同僚教員からの復帰に関する情報」までの4項目で構成される。

学校を自分の目で見ていないから、不安。多分、行っていたらそんなことはないと思うけど、その場にはないことが不安。自分が関わっていないから。学校現場はいろんなことが変わっていくし、どんどん進んでいくし、そこから離れていること

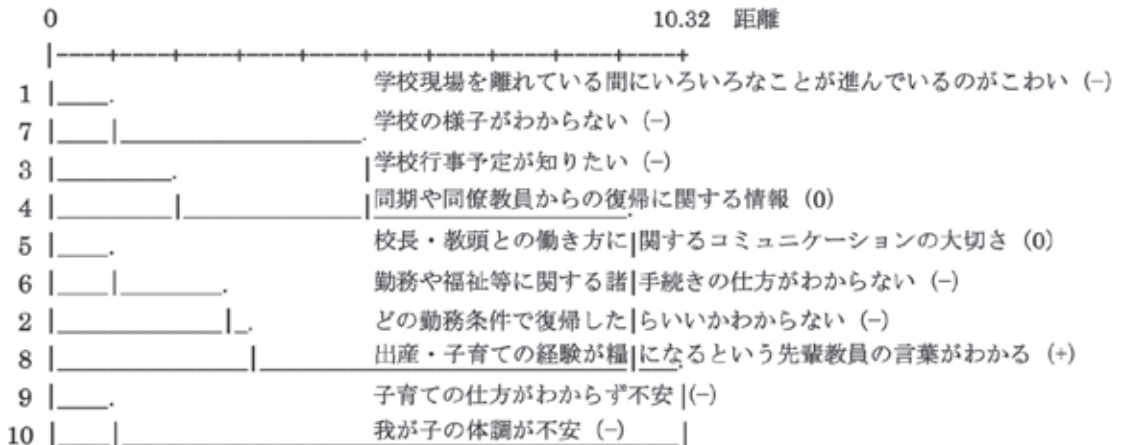


Figure 3 調査対象者 C のデンドログラム

1) 左の数値は重要順位 2) 各項目の後ろの () 内の符号は単独でのイメージ
10 項目のうち、+は 1 項目、-は 7 項目、0 は 2 項目

で、戻った時に自分が対応できるか。もともと自分に力があるわけじゃなくて、勤務時間で補ってきた。人に比べてできない分、時間をかけて仕事をやってきた。持ち帰りもして。多分自分に自信がないからこういうことを考えるのかもしれない。一方で、甘えたくないという思いもある。

クラスター2は、「校長・教頭との働き方に関するコミュニケーションの大切さ」から「出産・子育ての経験が糧になるという先輩教員の言葉がわかる」までの4項目で構成される。

変に気を遣いすぎていて、先生方は忙しいんじゃないかなと思って聞きにくいけど、多分聞いたら普通に教えてくれる。改めて考えてみると、この点は解決はできそうと思う。でも、簡単な手引きはあったらいいと思う。難しくて分厚い手引きはあるけど、簡単でわかりやすいのがあったらいいと思う。自分が先輩の立場としても、復職直後なら覚えていて教えてあげられるけど、時間が経てば忘れてしまうから。とにかくすごい不安だった。もっと聞いておけばよかった。家にいると、忙しすぎると思って電話ができない。申し訳なさすぎて。かかってきた電話で、溜めていた質問をしていた。変に気を遣いすぎていたのかもしれない。もっと気軽に電話をして聞いて、コミュニケーションを自らとっておけば、自分から連絡をとっておけばよかった。言われると嬉しいけど、先輩教員として言って、相手が嬉しいかわからないから言いにくい部分もある。だから、聞きたいこ

とは聞くべき。悩んでいたらもったいない。こんなこと聞いていいのかなとか思わずに聞いておけばよかった。でも、それは復職したから言えることで、家で一人でいると悩むしかなかった。とにかくずっと不安。休んだあと戻れるかなあとずっと思っていた。やっぱり時間がなくなることが、どこで補ったらいいんだって。

クラスター3は、「子育ての仕方がわからず不安」と「我が子の体調が不安」の2項目。

学校っていうより、親になって初めてのことで不安。子育てしながら他のことできるのかな。仕事せずに毎日がいっぱいいいっぱいの。ここに仕事に加わったらやっていけるのかなという思い。本当にバタバタ。我が子のことすらできていないのに、学校のことできるのかなという思い。子育て中の母は、みんなそうなんだろうと思う。子育てしながらのフルタイムは、みんな迷う。短時間勤務にするとか仕事を変えとか、同じ仕事の人じゃなくても。そういう思いを子育て支援センターで知り合ったママ友と共有できた。子育てについてわからないことも支援センターの先生や区役所の保健師さんにいっぱい話をしたりした。すごい不安だったから。

3.3.2. クラスター間の比較

クラスター1と2の比較：クラスター1は、現場のことが知りたい、現場から離れている、学校を見ていないことの不安。クラスター2は、手続き的、勤務条件とか働き方のこと。両方とももっと

聞いておけばよかった。自分自身もいっぱいいっぱいだったから。気持ちは不安、全て共通している。どんどんマイナス思考になっている。自分で理由をつけてはまっていつている。今となっては聞けばいいと思えるけど、このときの自分はこれをすごい悩んでいた。同僚に子どもの写真送ってって言ってもらってから、少し安心して質問できるようになった。出産で休むのは仕方ないことだけど、申し訳ないと思っていた。だから、自分のしょうもない用事を聞いてはいけな思っていた。本気で悩んでいた。私のコミュニケーション不足なのかなと思う。聞いたら申し訳ないというのもあると思うけど、子育てでいっぱいいっぱいになっていたのもあると思う。不安がつながっていた。負のループ。どんどん、深みにはまっている感じ。

クラスター2と3の比較：似ているのは不安というところ。子育てが不安だから、勤務条件も気になる。子育てしながら仕事ができるかなという不安が共通しているところ。もっといろんな先輩に聞いても良かった。自分から連絡することはしていない。一人で抱え込もうとしている。子育てしながら、仕事をしている先輩にもっと相談したり聞いたりすればよかった。みんな悩んでいる。

クラスター1と3の比較：出産するまで飲みに行くのが好きで毎日のように行くのが当たり前だった。出産して飲みに行けなくなって、今まで話していたのが急に家で一人、毎日子どもの息を確認するという生活のなかで、不安をつくりだしていたように思う。自分の知らないことがどんどん増えていつて、子育てもわからなくて、最初は子育てを楽しめていなかった。学校は自分の全てだった。そこに新しいことが入ってきて生活が一変。好きなことができない、新しいことばかり、人との関わりとの時間もない。だからすごい不安で、いろいろなことを考えたのかなあ。子育てなんて初めてなのでわからなくてできなくて当然なのに、難しく考えすぎている、それが共通点。死んだらどうしようってずっと考えていた。仕事もこれではだめだと感じ自分はダメだと思っていた。すごいマイナス思考。そこまででもない、今なら言えるのだけ。

3.3.3. 全体のイメージ

全体的に不安、考えすぎ悩みすぎ、マイナス思考になりすぎていた。もうちょっと楽観的にとらえたらいいのになと今振り返ると思う。

相談できる人がいないわけではなかったけど、

でも、相談したところで、自分で勝手に悲観的になっていたかもしれない。解決はできそうなのできない。抱え込みすぎていたのかなあ。子育ての仕方がわからないというか、ご飯でうまく栄養とれてるのか、子どもが寝ているときも不安で、ろくに寝れていなかった。

3.3.4. 調査協力者Cについての考察

クラスター1は、「学校現場を離れている間にいろいろなことが進んでいるのがこわい」、「学校の様子がわからない」という思いから、「学校行事予定が知りたい」と考え、「同期や同僚教員からの復帰に関する情報」を得ようとするなど、復職に向けて行動しようとしていることから、＜学校現場がわからないことの不安と解決のための方法＞と命名できよう。

クラスター2は、「どの勤務条件で復帰したらいいかわからない」、「勤務や福祉等に関する諸手続きの仕方がわからない」なかで、先輩教員や同僚教員、「校長・教頭との働き方に関するコミュニケーションの大切さ」に気づいたことから、＜同僚・上司とのコミュニケーションの重要性＞のクラスターと言えよう。

クラスター3は、「我が子の体調が不安」等、「子育ての仕方がわからず不安」を感じていたことから、＜子育てに関する不安＞と解釈できよう。

全体としては、＜学校現場がわからないことの不安と解決方法（クラスター1）＞が＜同僚・上司とのコミュニケーションの重要性（クラスター2）＞に結節し、最後にそれらと＜子育てに関する不安（クラスター3）＞が結節していた。調査協力者A、Bと同様に学校現場がわからないことの不安を解消するのは、A、Bの語りにもあったように、同僚教員や上司とのコミュニケーションであった。それにより、直接的には学校現場がわからないことの不安は軽減される可能性があるものの、産休・育休からの初めての復職と同じく初体験である子育てにも不安を感じているため、10項目のうち、7項目のイメージがマイナスになるなど、全体的に不安で一人で抱え込む傾向にあった。調査協力者Cは、子育て支援センターや区役所の子育て支援課等の公的機関を積極的に活用しているにも関わらず、大きな不安を抱えていた。それだけ、産休・育休からの復職前の教員は、精神的に危機的な状況に追い込まれている可能性が示唆された。

4. 総合的考察

本研究では、産休・育休からの復職者を対象に復職前の小学校教員の態度構造の分析を試み、産休・育休からの復職支援への方策を探ることが目的であった。調査協力者のクラスターや連想項目、語りから、以下のようなことが示された。

調査協力者 A<学校の現状把握欲求（クラスター2）>、B<働き方に関する情報や相談の希求（クラスター2）>、C<学校現場がわからないことの不安と解決のための方法>のいずれも、復職する学校現場の状況がわからないことの不安を感じ、それらの情報を得たり、働き方について相談したりしたいという思いをもっていた。変化の激しい学校教育の現場を長期間離れる産休・育休取得者がそのような思いをもつことは、極めて自然であろう。一方、そのような思いをもちながらも、調査協力者たちは、自ら学校に相談、連絡することを憚り、できずにいた。それは、学校現場の忙しさを知るとともに、実際の距離に比例して同僚や上司との心的距離が離れ、関係が疎遠になるからであった。

そのような状況に陥らないようにするためには、自治体や教育委員会レベルで、最新の教育情報や指導方法を産休・育休取得者に定期的に伝える機会を設けるとともに、学校レベルで校長や教頭が復職時の学校の現状について伝えることが重要であると考えられる。さらに管理職や同僚教員が SNS の活用等連絡手段を工夫し、産休・育休取得者の負担を考慮し状況を判断しながら、必要に応じて積極的に連絡相談にのることが産休・育休からの復職前の教員の不安を軽減する可能性が示されたと言えよう。

また、調査協力者 A、B は<仕事と家庭の両立への不安>のクラスターが共通していた。それらは、復職後の働き方の知識と関連していることが考えられる。管理職から、復職を予定している教員に適切なガイダンスを行うことは欠かせないだろう。一方、教員の多忙化が叫ばれる現代において、それらの伝達の全てを管理職の責とすることは、無理がある。調査協力者 B の連想項目や C の語りにもあるように、各自治体には短時間勤務等の働き方に関する規定があるが、それらが復職を予定している教員にとって読みやすく理解しやすいような手引きがあると、復職前の教員の不安が軽減されるとともに、管理職や事務職の働き方改革につながると言えるだろう。

それらの情動的サポートとともに欠かせないと考えられるのが情緒的サポートである。知識と

してそれらの情報があるだけであるのと、既に復職している教員が自らの体験をもとに相談にのるのでは、大きな差があるだろう。同じ不安や苦労を経験している先輩・同僚教員から、その経験を聞くとともに、不安や疑問を傾聴してもらい、共感的に相談にのってもらうことで、復職を予定している教員の気持ちの多くを占める不安が軽減されたり、安心して復職できることにつながるのではないだろうか。

最後に本研究の課題について述べる。本研究の調査協力者は3名と少数であり、スノーボールサンプリングの結果、所属自治体も同じであったため、サンプルに偏りがある可能性も考えられる。そのため今後は、調査協力者を増やすとともに、複数の自治体の教員に調査を実施、分析することで、産休・育休からの復職支援への方策を多角的に検討できるだろう。また、復職前だけでなく、復職後の態度構造も分析し、長期的な視点で復職支援への方策を検討していくことが今後の課題となるだろう。

引用文献

- 文部科学省（2022）.「教師不足」に関する実態調査
- 長崎県教育委員会（2016）.長崎県教育委員会 特定事業主行動計画～女性活躍とワーク・ライフ・バランス推進のために～
- 内藤哲雄（2017）.PAC 分析実践法入門（改訂版）ナカニシヤ出版
- 高島裕美（2014）.教員の職場における「ジェンダー・バイアス」-女性教員の職務配置のあり方に着目して- 現代社会学研究, 27, 37-54.
- 山本直子（2018）.公立高校の女性教員の出産・育児による「休む」ことへの意識 学校経営研究, 43, 20-29.
- 横山浩誉・北村 有香・小林 貴子・臼田寛・河野 公一・後藤研三（2013）.看護職のメンタルヘルス対策に関する実態調査 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 201-207.

付記

本研究は、科研費 23K12724 の助成を受けた。